

5月下旬頃から令和2年産米の育苗作業が始まります。“苗半作”と昔から言われるように、良質米の安定生産のためには健苗の育成が重要です。

～ポイント～

◎田植予定日から逆算して、種子の浸漬日や播種日を決めます。

◎高温障害を避けるため、田植は6月20日以降に行います。

1 種子消毒

(1) 種籾10kg当たり下記農薬の混合薬液20ℓを用い、24時間浸漬します。

薬剤名	使用濃度（種籾10kg当たり使用量）
テクリードCフロアブル	200倍（100ml）
スミチオン乳剤	1000倍（20ml）

※いもち病対策を強化する場合は、ベンレート水和剤（種籾10kg当たり 20g）も混合します。

(2) 浸漬中は薬液を2～3回かき混ぜ、全体に薬液がまわるようにします。

浸漬後は水洗いせず、そのまま催芽します。

(3) 種子消毒に使用した薬液は、絶対に河川・クレーク等に流さないでください。

2 浸種及び催芽

(1) 種子消毒後、水に3～4日間浸種します。

(2) 催芽（芽出し）の程度は、鳩胸程度が適当です。また、種籾が酸素不足にならないように、

浸種中の水は毎日交換するとともに、種子の芽出しをそろえるため上下を入れ替えます。

(3) 直射日光が当たると発芽ムラや高温障害の原因になるため、直射日光を避けた場所で浸種を行ってください。

この程度まで催芽させる（鳩胸程度）→



3 播種及び出芽

- (1) 1箱当たり催芽粃1合5勺(約170g)～1合7勺(約190g)となるよう播種量を調整します。厚播きすぎると苗が軟弱になり活着が悪くなります。
- (2) 播種時にかん水を兼ねて、苗箱20箱に対しタチガレエースM液剤20ml/水10ℓ(500倍)を混ぜて、かん注します。
- (3) 健苗育成及び育苗中の病害発生予防のため、**平床出芽を基本**として下さい。

平床出芽

積み重ねより1～2日出芽が遅れますが、高温やカビ等の育苗障害が出にくく、健苗が育成できます。

- (ア)まとまった雨が降っても、冠水しないような育苗場所を選定します。
- (イ)苗箱を並べる用地を水平にならしめます。
- (ウ)田畑に並べる場合、ビニールをしきます。根が地面に下りるのを防ぎます。
- (エ)厚さ1～3cmの台木またはパイプをわたすことで、苗箱を水平に保ち、水分の偏りをなくします。高い部分は乾燥しやすくなり、出芽・生育が不良となります。
- (オ)播種時に水をたっぷりかけておきます。
- (カ)苗箱を並べます。
- (キ)寒冷紗を二重に被せ、苗長4～5cmになったら完全に外します。

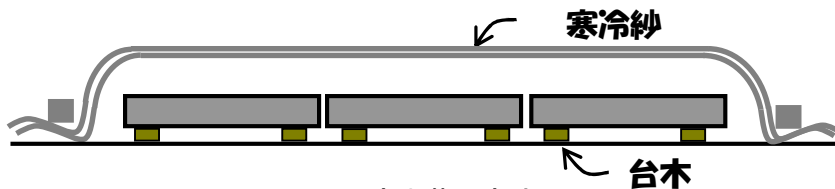


図 平床出芽の方法

- (4) 水管理は、天候によりますが、寒冷紗二重の期間は1日1～2回、寒冷紗除去後は1日2～3回十分にかん水します。天候や床土の種類によっては乾きやすく、水枯れが発生する場合がありますので、十分注意します。

注意

「元気つくし」は苗が伸びやすいので、「ヒノヒカリ」よりも1～2日早めの寒冷紗を除去するよう心がけて下さい。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!